

平成 17 年度図書館情報メディア研究科プロジェクト研究 研究成果報告書

種目	奨励研究	研究代表者氏名	鈴木 佳苗
研究課題	地域の図書館におけるメディアコンテンツ体験の実践：子どもたちの創造性、コミュニケーション能力への効果		
研究組織（研究代表者及び研究分担者）			
氏名	所属研究機関・部局・職	現在の専門	役割分担
鈴木 佳苗	図書館情報メディア研究科・講師	発達社会心理学・社会情報学	研究の計画・実施・分析
西岡 貞一	図書館情報メディア研究科・客員教授	メディア開発論	研究の計画・実施
研究目的			
現代のような情報社会では、子どもたちの生活にメディアが浸透しており、メディアの持つ豊かな可能性を子どもたちの発達にどのように活かしていくことができるのかを考えていくことが課題となっている。本プロジェクトでは、地域との連携を通して、メディアの豊かな可能性を子どもたちが体験できる場づくりを行うことを目的としている。 具体的には、子どもたちにとって身近な場所である地域の図書館を様々なメディアコンテンツに触れることのできる体験の場とし、子どもたちの創造性、コミュニケーション能力を育むためのワークショップ（以下WSと記す）を開催することとした。最近では、地域で子どもたちに対するWSを開催する例が増えつつあるが、どのように企画・開催すればよいのかについての情報は少ない状況にある。また、WSはこれまでイベントとしての開催が多かったが、子どもたちの創造性、コミュニケーション能力を育むためには地域で継続的に開催することが重要であると考えられる。 そこで、本プロジェクトでは、1) WSの企画・実施に実績のある組織、地域の図書館の協力を得て実際にWSを企画・開催し、2) WSに参加した子どもたちの感想やWS中の様子から、WSが子どもたちの創造性、コミュニケーション能力に及ぼす効果の可能性を検討し、3) 今回のWS全体を通して、今後、地域の図書館で継続的にWSを開催するために考慮すべき点を検討する。			
研究成果			
本プロジェクトの成果としては、以下の3点が挙げられる。 1) <u>地域の図書館でのWSの企画・開催</u> 企画 WSは、CAMP（Children's Art Museum & Park: 株式会社CSKホールディングス）および牛久市立中央図書館の協力を得て行われた。協議の結果、11月に3日間、CAMPの「クリケットワークショップ（M.I.T.で開発された『クリケット』というモーターを動かす小さなコンピュータを使って作品づくりをするWS）」を開催することに決定した。 開催 WSは、11月6日（日）、19日（土）、20日（日）の3日間に牛久市立中央図書館にて開催した。WSには3日間で地域の小学4年生～中学生53名が参加した。参加者は2人あるいは3人1組のグループになり、その日のテーマ（例：牛久沼にすんでいる生きもの）からイメージする作品づくりを体験した。また、牛久市立中央図書館職員4名、筑波大学学生15名がファシリテータとして参加し、子どもたちの様子を見ながら制作活動をサポートしていた。 2) <u>WSが子どもたちの創造性、コミュニケーション能力に及ぼす効果の可能性</u> WSが子どもたちの創造性、コミュニケーション能力に及ぼす効果の可能性について、WSに参加した子どもたちの感想、ファシリテータの感想から検討した。 WSに参加した子どもたちの感想 WS後の子どもたちの感想を集計した結果、WSに対するポジティブな感想が多く見られた。その中でも「楽しかった」「良かった」というWS全体へのポジティブな感想が最も多かった。			

多く、また、作品づくりや（モーターを動かすための）プログラミングが楽しかったという制作過程に対するポジティブな感想も見られた。さらには、「いいものができた」といった自分たちの作品づくりへの満足、「協力してできた」といったコミュニケーションへの満足や、「またあれば来たい」という今後のWS開催への期待も見られた。

WSに参加したファシリテータの感想 WS後のファシリテータの感想を集計した結果、WSでの作品づくりの過程・完成した作品から、子どもたちの想像力の豊かさを実感したという意見や、作品にこだわりや独創性を感じたという意見が見られた。また、WSでは各自が自分の作りたいものを制作するといったグループも見られ、制作過程で子どもたち同士がコミュニケーションをとる難しさを指摘する意見も見られた。

今回のWSでは、総じて、子どもたちが仲間とコミュニケーションをとりながら様々な素材を組み合わせで工夫し、ものづくりをすることを楽しんでいたことが示された。また、次回も参加したいという感想も見られ、ものづくりに対する子どもたちの関心を高めることができたのではないかと考えられる。

3) 地域の図書館で継続的にWSを開催するために考慮すべき点

今回のWS開催を通して、今後の継続開催のためには、WS中の音が周囲の利用者にとって気にならないスペースを安定して確保すること、WS開催時間を短縮すること、人（ファシリテータ）を確保し、育成することが重要であることが示唆された。さらに、機材・費用を安定して確保するとともに、図書館資料を効果的に利用できる工夫や、対象年齢を拡げてより多くの子どもたちが参加可能なWSの検討を行っていくことを期待する意見も見られた。

代表的な研究発表・特許等の成果一覧、特記事項等

本プロジェクトについては、以下の報告がある。

- 1) 2005年9月 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科主催 コンテンツセミナーで講演
(鈴木佳苗)
 - 2) “大人 Message to CAMP” “社会貢献 - CAMP” <<http://www.camp-k.com/otona/home/>> での活動報告
(西岡貞一)
- また、今後、学術雑誌等に研究成果の発表をすることを予定している。

自己評価

本プロジェクトでは、3つの目的に対して、それぞれ着実な成果が得られたと言える。

まず、WSの企画・開催については、今回、最近注目されてきている子どもたちを対象としたWSを、初めて地域の図書館で開催したという点があげられる。今回のWSは、初めての試みであったにもかかわらず、多くの子どもたちの参加を得ることができた。これは、WSの広報に図書館員の方々の協力を得ることができたことが大きい。

子どもたちの創造性やコミュニケーション能力に対するWSでの体験の効果について、本プロジェクトでは子どもたちの感想を質的に検討し、基礎的な資料を示すことができたと言える。今後、子どもたちの創造性やコミュニケーション能力への効果を明らかにするためには、創造性、コミュニケーション能力として測定する概念を明確にし、測定するための基準や尺度を整えていくことが必要であり、課題は多いが、こうした検討を踏まえてWSの効果を長期的に検討していくことが望まれる。

また、今回のWSで見られたように、子どもたちがグループ内でコミュニケーションをとることが難しい場合もあることから、子どもたちがより楽しく充実した体験ができるようにファシリテータのサポートの仕方についても検討しながら、効果的なWSの環境条件についても検討していくことが期待される。さらには、子どもたちだけではなく、今後、ファシリテータ体験による学生への教育効果も検討していくことも重要であろう。

今後の課題としては、地域の図書館で継続的にWSを開催するために考慮すべき点をまとめることができた。本プロジェクトの成果により、来年度もCAMPおよび牛久市立中央図書館の協力を得て、図書館でWSを開催できる予定となっている。来年度以降もさらに検討を進め、本プロジェクトが地域の図書館でのWS開催のモデルとなり、全国の図書館でのWS開催へとつながっていくことを期待している。